

映画『グリーンブック』のメッセージ

——差別をなくす対話——

鈴木悠悟

1960年代のアメリカにおいて、黒人が安全に旅をするために不可欠だったガイドブック「グリーンブック」は、当時の激しい人種差別の象徴であった。本論文は、この冊子を手に差別の残る南部を巡る黒人ピアニストのシャーリーと、イタリア系白人運転手トニーの交流を描いた映画『グリーンブック』を題材とし、差別の根源とその解消方法について考察したものである。

論文の前半では、奴隷制度からジム・クロー法（人種隔離法）に至るアメリカ黒人史を概観し、映画の舞台である1962年当時、法制度によって差別が公然と肯定されていた社会的背景を明らかにしている。作品の分析においては、当初は黒人が使ったグラスを捨てるほどの偏見を持っていたトニーが、シャーリーと共に時間を過ごし対話を重ねる中で、彼が受ける不当な扱いに憤りを感じる親友へと変化していく過程に注目している。同時に、周囲を拒絶していたシャーリーも、トニーとの交流を経て白人社会へ歩み寄る勇気を得るなど、双方向の変化が描かれている。

また、映画業界における有色人種の表象（描かれ方）についても言及している。本作が「白人救世主」といった批判を受けつつも、アカデミー賞受賞などを通じて人種的多様性の重要性を世に知らしめた意義は大きいと論じた。

最終的な結論として、差別とは無根拠な思い込みや伝統的な意識に基づくものであり、一人の人間として「対等に対話」し、相手を正しく知ることこそが、差別意識を根本から解消するための鍵であると主張する。現代でも **Black Lives Matter** 運動に象徴されるような差別問題が根深く残る中で、相互理解のための「対話」を継続することの重要性を強調した。